

〔書評〕

アンジェリカ・グデン著
『演劇・絵画・弁論術
一八世紀フランスにおけるパフォーマンスの理論と芸術』
譲原晶子訳、筑波出版会：2017年

呉宮百合香

本書は、18世紀フランス演劇を弁論術および視覚芸術との関係から論じた研究書である。西洋演劇研究において見過ごされがちな18世紀だが、実は身体パフォーマンスの営みが豊かな発展を遂げた時代であった。著者グデンは、当時の批評言説の豊富な引用や、作品内に見られる表象の読解を通じて、当時の思想的・社会的背景を立体的に描き出してゆく。広い知識と緻密な資料調査とに裏付けられた本書の価値は、刊行から30年以上経った今なお色褪せない。

原題は『アクティオと説得 [Actio and Persuasion]』（1986）だが、邦訳刊行にあたって訳者の譲原晶子は、演劇・絵画・弁論術という本書のキーワードを端的に打ち出す題名へと変更した。一方では演劇が自らの社会的地位を確立するために絵画や弁論術との類似性を主張し、他方では実社会や他の芸術領域における「演劇性」が盛んに議論された——しばしば複数の話題が絡み合って展開し、さらに人名や専門用語も頻出する本書を読み進める道標となるのが、36頁にわたる訳註である。既刊邦訳書の案内もあり、興味に応じて適宜参照できるようになっている。また、「アティチュード」や「ク・ド・テートル」といった翻訳しがたい概念については、本文中ではあえてカタカナ表記のまま残し、訳註で説明を加える形をとっている。特定の訳語を与えることは、一方で意味の矮小化と形骸化の危険を伴う。時代による語義変化を鋭く捉え、概念と実際の現象の結びつきを自明のこととせず探り続ける譲原の姿勢——その姿勢は彼女の単著『踊る身体のディスクール』（春秋社：2007）における舞踊用語の変遷の詳細な検討とも通ずる——がそこにはうかがえる。

さて、本書の主眼は演劇である。とはいえ諸芸術間の相互関係が活発に論じられ、理論上も実践

上も緊密な関係にあった18世紀の気風を反映するかのごとく、グデンは横断的な記述を展開する。その編み合わせのうちに、縦割的な歴史研究では捉えがたい「時代の空気」が立ち上がってくるのだ。

たとえば一般に舞踊の文脈では、18世紀は装飾的な舞踊から「劇」としての舞踊への転換が図られた時代と語られる。しかしそこに至る流れは決して単線的ではない。王立舞踊アカデミー設立に由来する体系化・理論化の気運の高まりや、宮廷バレエの系譜に連なる一方で、イタリア人劇団や定期市芝居の芸人たちが演じるパントマイムなど、同時代の大衆的なパフォーマンスの流れも汲んでいる。そしてもちろん、デイドロの「タブロー」論がしばしば引き合いに出されるとおり、演劇の取り組みとも呼応している。

多角的な描写はまた、ある特定の領域の歴史の変遷をより大きな文脈のうちに捉えることも可能にする。19世紀に入ると舞踊は、劇的バレエの伝統を引き継ぎつつも、ドラマよりも技巧を重視し、様式化と曲芸化の傾向を強めていく。フランス革命と産業革命によって客層が変化したのも大きな要因だが、それと同時に、当時の演劇批評家たちがアクティオの力を高く評価しながらもそれを単独で用いることの限界を認めていたとおり、身体のみによって言語的な物語を「語る」ことの限界に行き当たったということもあるだろう。加えて、超絶技巧やスペクタクル性への嗜好は19世紀に突然生じたものではなく、その前の時代からすでに醸成されていたことも本書の描写から推察できる。

演劇性と視覚性、そして言葉と身体の均衡は、舞台芸術の歴史の中で常に議論の対象となってきた。領域の壁を超えて多くの示唆を与えてくれる必読の書である。